

各中・高等学校における「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標
設定に関する Q&A (第二次案)

〔趣旨・目的〕

1. 何のために「CAN-DO リスト」の形で学習到達目標を設定するのですか。
2. 「CAN-DO リスト」の形で学習到達目標を設定すると、どのような効果があるのですか。
3. 学習到達目標とは、全ての生徒が達成すべき目標ですか。あるいは、達成することが望ましいものにとどまる目標ですか。
4. 「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標と学習指導要領上の目標とはどのような関係にあるのですか。
5. 「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標は教室内活動に即したものですか。あるいは、実生活における外国語の使用場面に即したものとなるのですか。
6. 全ての中・高等学校において作成が求められるものですか。
7. 小学校においても、今後、作成が求められるのですか。

〔設定手順〕

8. どのようにして「CAN-DO リスト」の形で学習到達目標を設定するのですか。
9. 能力記述文とは何ですか。
10. 能力記述文はどのように作成するのですか。
11. 「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標には文法事項も含めるのですか。
12. 能力記述文に、話したり書いたりする文の数や語数、要する時間などの数値的な目安を含めてもよいのですか。各能力記述文はどの程度、具体的なものとする必要があるのですか。
13. 学年ごとに学習到達目標を設定する際、一つの技能ごとにいくつくらいの能力記述文を作成するのが適当ですか。
14. 「CAN-DO リスト」の形で学習到達目標を設定するにあたって、国のひな形はあるのですか。
15. 外部検定試験に関する到達目標を設定してもよいのですか。(例. ○○試験で○級あるいは○点がとれるようになる)
16. 「CAN-DO リスト」の形で学習到達目標を設定するにあたって、学校内や外国語科内ではどのように取り組めばよいのですか。
17. 「外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠 (CEFR)」や CEFR を踏まえた国内の取組、外部検定試験の実施団体が開発した「CAN-DO リスト」をそのまま使ってもよいのですか。
18. 入試に関する事項 (例. 大学入試センター試験の大問○で○割得点できる) を含めてもよいのですか。
19. 生徒間の学力差が大きい学校においては、どのように学習到達目標を設定すればよいのですか。中間層の生徒の英語力を想定するのですか。
20. 卒業時の学習到達目標は第 3 学年 (最終学年) の目標と同じものとなるのですか。

〔活用方法〕

21. 「CAN-DO リスト」の形で設定した学習到達目標は、どのように活用するのですか。
22. 従来作成している年間指導計画と「CAN-DO リスト」の形で設定した学習到達目標はどのような関係にあるのですか。
23. 「CAN-DO リスト」の形で設定した学習到達目標の達成に資する授業実践の例を教えてください。
24. 外国語科における観点別学習状況の評価と「CAN-DO リスト」の形で設定した学習到達目標はどのような関係にあるのですか。
25. 観点別学習状況の評価における全ての観点について「CAN-DO リスト」の形で目標設定をするのですか。
26. 観点別学習状況の評価における単元の評価規準を「CAN-DO リスト」の形で学習到達目標として使ってもよいのですか。
27. 「CAN-DO リスト」の形で学習到達目標は、どのように公表したり生徒や保護者等と共有したりすればよいのですか。

〔設定した学習到達目標の達成度を把握するための評価〕

28. 設定した学習到達目標すべてについて評価しなければならないのですか。
29. 「CAN-DO リスト」の形で設定した学習到達目標を達成できなかった生徒についてはどのように対応するのですか。
30. 「CAN-DO リスト」の形で設定した学習到達目標を、生徒による自己評価に用いてもよいのですか。
31. 「CAN-DO リスト」の形で学習到達目標の評価を、学年末の成績（評価や評定）にどう反映させるのですか。

〔設定した学習到達目標の見直し〕

32. 設定した学習到達目標の見直しは、いつ、どのように行えばよいのですか。
33. 設定した学習到達目標について、生徒の達成割合を示す必要はあるのですか。

〔趣旨・目的〕

1. 何のために「CAN-DO リスト」の形で学習到達目標を設定するのですか。

(答)「CAN-DO リスト」の形で学習到達目標を設定する目的として、以下のことがあげられます。

- ・ 学習指導要領に基づき、観点別学習状況の評価における「外国語表現の能力」と「外国語理解の能力」について、生徒が身に付ける能力を各学校が明確化し、主に教員が生徒の指導と評価の改善に活用すること
- ・ 学習指導要領を踏まえ、「聞くこと」、「話すこと」、「読むこと」及び「書くこと」の4技能を総合的に育成し、外国語によるコミュニケーション能力、相手の文化的・社会的背景を踏まえた上で自らの考えを適切に伝える能力並びに思考力、判断力、表現力を養う指導につなげること
- ・ 生涯学習の観点から、教員が生徒と目標を共有することにより、言語習得に必要な自律的学習者として主体的に学習する態度・姿勢を生徒が身に付けること

2. 「CAN-DO リスト」の形で学習到達目標を設定すると、どのような効果があるのですか。

(答) 実際の言語使用場で言語を使って何ができるかということを見通した指導と評価を行うことができるようになります。例えば、学習到達目標を「簡単な物語文を読んで、概要を口頭で述べることができる」と設定した場合、その目標が達成される可能性を高くするような指導を計画し、実施することになります。したがって、教科書のどの単元をいつ教えるかといった時間軸に沿った指導にとどまらず、目標を達成するために教科書の活用の仕方を工夫しつつ、教科書以外の教材も加えるなどして、言語活動を計画し、授業を実際のコミュニケーションの場とすることができます。

また、「簡単な物語文を読んで、概要を口頭で述べることができる」という目標が達成されたかどうかを把握するためには、実際に口頭で概要を述べるというパフォーマンスをすることによって評価しなければなりません。従来の評価方法が、個別の言語知識を問う筆記試験に偏りがちであった場合は、「CAN-DO リスト」の形で学習到達目標を設定することにより評価方法も併せて改善することができます。加えて、パフォーマンステストやインタビューテストを通じて生徒理解が深まることも期待されます。

さらに、学習到達目標を設定するに当たって、外国語科担当教員等全員が参加するとともに、目標を設定した後も、実際の授業における言語活動の計画や言語活動を効果的に行うための教材の準備、指導方法や評価方法の共有等に当たって協力し続けることにより、外国語科担当教員等のチームワーク(同僚性)が高まることも期待されます。

また、教員と生徒が外国語学習の目標を共有することによって、生徒自身にも、言語を用いて「～ができるようになりたい」、「～ができるようになることを目指す」といった自覚が芽生え、言語習得に必要な自律的学習者としての態度・姿勢が身に付くとともに、「言語を用いて～ができるようになった」

という達成感による学習意欲の更なる向上にもつながることが期待されます。

3. 学習到達目標とは、全ての生徒が達成すべき目標ですか。あるいは、達成することが望ましいものにとどまる目標ですか。

(答) 本手引きにおける学習到達目標とは、各学校において、全ての生徒に求められる英語力を達成するためのものです。

4. 「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標と学習指導要領上の目標とはどのような関係にあるのですか。

(答) 「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標は、学習指導要領の外国語科及び外国語科の各科目の目標に基づいたものである必要があります。具体的には外国語科及び外国語科の各科目における目標のうち、「外国語表現の能力」及び「外国語理解の能力」の観点に対応するものについて、「CAN-DO リスト」の形で学習到達目標を設定することが適切であると考えられます。

学習指導要領上、中学校の外国語科の目標は「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う。」となっています。更に、英語の目標は、次の4つを示しており、その他の外国語についても英語の目標に準じて行うこととしています。

- (1) 初歩的な英語を聞いて話し手の意向などを理解できるようにする。
- (2) 初歩的な英語を用いて自分の考えなどを話すことができるようにする。
- (3) 英語を読むことに慣れ親しみ、初歩的な英語を読んで書き手の意向などを理解できるようにする。
- (4) 英語で書くことに慣れ親しみ、初歩的な英語を用いて自分の考えなどを書くことができるようにする。

上記の目標を卒業時まで達成するためのものとして、学年ごとの学習到達目標を「CAN-DO リスト」の形で設定することになります。学習指導要領においても、指導計画作成上の配慮事項として、「各学校においては、生徒や地域の実態に応じて、学年ごとの目標を適切に定め、3学年間を通して英語の目標の実現を図るようにすること。」とされています。

一方、高等学校の外国語科の目標は、「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりするコミュニケーション能力を養う。」となっており、更に、科目ごとに目標が設定されています。高等学校においては、学習指導要領の外国語科及び外国語科の各科目の目標に基づき、生徒の実態等に応じて、学年ごとの学習到達目標を「CAN-DO リスト」の形で設定することになります。中学校とは異なり、単位制を併用していること、外国語科の科目の開設状況が各学校により異なることに留意が必要です。

※ 具体的には、「10. 能力記述文はどのように作成するのですか」及び「24. 観点別学習状況の評価と『CAN-DO リスト』の形で設定した学習到達目標とはどのような関係にあるのですか。」の回答を参照ください。

追加質問

5. 「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標は教室内活動に即したものでしょうか。あるいは実生活における外国語の使用場面に即したものとなるのでしょうか。

(答) 教室内における言語活動と実生活における外国語の使用場面を区別する必要はないと考えられます。学習指導要領では、指導に当たっては、実際に言語を使用した活動を行うように配慮することとされており、そのために取り上げる生徒の身近な暮らしに関わる場面や具体的な言語の働きの例が示されています。教科書を中心とした教材において扱われている言語材料をもとに、授業を実際のコミュニケーションの場面とすることが必要です。すなわち、教室内においても、実生活におけるコミュニケーションの場面を想定した言語活動を充実させることが求められます。ただし、各目標の設定に当たっては、その達成度を把握するための評価が可能であることが条件となります。

6. 全ての中・高等学校において作成が求められるのでしょうか。

(答) 「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標は、全ての中・高等学校において作成することが望まれます。

7. 小学校においても、今後、作成が求められるのでしょうか。

(答) 小学校の外国語活動の目標は、「外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。」ことです。したがって、「聞くこと」や「話すこと」などの技能を用いて何ができるようになるかという観点からの目標設定にはなじみにくいことから、小学校の外国語活動について、作成が求められるものではありません。

〔設定手順〕

8. どのようにして「CAN-DO リスト」の形で学習到達目標を設定するのでしょうか。

(答) 外国語担当教員等全員の参加の下、生徒の学習の状況や地域の実態等を

踏まえ、卒業時の学習到達目標を、言語を用いて「～することができる」という形で設定します。次に、卒業時の目標を達成するための学年ごとの目標を、年間の指導と評価の計画、単元ごとの指導と評価の計画の策定と並行して、4技能を用いて「～することができる」という形（「CAN-DO リスト」の形）で設定します。その際、卒業時の学習到達目標、学年ごとの「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標、年間及び単元ごとの指導と評価の計画が、それぞれ相互に対応したものとなるよう調整します。

9. 能力記述文とは何ですか。

(答) 言語の4技能（「聞くこと」、「話すこと」、「読むこと」及び「書くこと」）を用いて何ができるようになるかを「～することができる」という形で具体的に記述したものが能力記述文であり、本手引きでは、卒業時までには達成する学習到達目標、及び学習指導要領の外国語科及び外国語科の各科目の目標に基づく学年ごとの学習到達目標を、能力記述文を用いて設定することを推奨しています。能力記述文は、ある言語の使用場面における言語活動を表すものであり、生徒の言語能力を踏まえたものとする必要があります。さらに、学習活動の一環として行う言語活動であり、各学校が適切な評価方法を用いて評価できるものである必要があります。

(能力記述文の例)

- ・ 基本的な挨拶の決まり文句を聞いて、理解することができる。
- ・ 日常生活に関する簡単な質問をしたり、簡単な質問に答えたりすることができる。
- ・ 身近な話題について発言したり、反応したりすることができる。
- ・ 写真や絵、地図などの視覚的補助を利用しながら、簡単な語句や文を使って、自分の毎日の生活に直接関連のある話題（自分のこと、学校のこと、地域のことなど）について、短いスピーチをすることができる。
- ・ 構成がはっきりした物語や現代の文学作品のあらすじを理解することができる。
- ・ 自分の関心のある分野の様々な話題について、簡単なつながりのある文章を書くことができる。

10. 能力記述文はどのように作成するのですか。

(答) 学習指導要領の外国語科及び外国語科の各科目の目標に基づく学年ごとの学習到達目標を示す能力記述文については、例えば、以下の方法を用いて作成することができます。

- ・ 高等学校の場合は学習指導要領上の外国語科の目標、当該学年で履修する科目の目標及び教科書の内容など、中学校の場合は学習指導要領上の外国語科の目標及び当該学年で使用する教科書の内容などを踏まえ、当該学年の終了時点で生徒が達成すべき目標を能力記述文で表す。同時に、これらのごとを踏まえ、教科書などの教材を用いた単元ごとの目標を設定し、それが能力記述文に対応したものになっているかを検討する。

また、複数の単元の目標をまとめて一つの学習到達目標を示す能力記述文を作成するという方法も考えられる。その際、例えば、4技能のうち「話すこと」に関する目標がない場合などには、年間及び単元の指導計画を見直す必要があり、見直した指導計画を踏まえて、学習指導要領の外国語科及び外国語科の各科目の目標に基づく学年ごとの学習到達目標を示す能力記述文を作成する。

- ・ 必要に応じて、「外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠 (CEFR)」や CEFR を踏まえた国内の取組、外部検定試験の実施団体による既存の取組等を参照し、これに実際の学習活動を踏まえた単元の目標を加味して、実態に合わせるための調整を行う。

(例) 例えば、高等学校卒業時の生徒に求められる英語力の補足的な外部指標として外部検定試験の級や点数を目安として掲げている場合、当該試験の該当する級や点数に相応する CAN-DO リストを参照して、そこに到達するための学習指導要領の外国語科及び外国語科の各科目の目標に基づく学年ごとの学習到達目標案を作成し、これに実際の学習活動に基づいた単元の目標等を考慮して修正を加えるといった方法が考えられる。

- ・ 中学校の外国語科における英語の目標は3年間を通じたものが4技能ごとに「～できるようにする」という形で学習指導要領に示されているので、学年ごとの目標は、例えば、これらの目標を「どのような条件の下でできるか」、「どの程度できるか」、「どのような内容であればできるか」などによって段階に分けたものを設定することが考えられる。
- ・ 高等学校についても、卒業時の目標を達成するための学年ごとの学習到達目標を、「どのような条件の下でできるか」、「どの程度できるか」、「どのような内容であればできるか」などによって段階に分けたものとして設定することが考えられる。

11. 「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標には文法事項も含めるのですか。

(答) 文法は、コミュニケーションを支えるものであり、言語活動と効果的に関連付けて指導するものです。例えば、過去の事柄について表現するためには、動詞の時制の使い方を理解する必要があります。

CAN-DO リストの形での学習到達目標との関係では、観点別学習状況の評価における「言語や文化についての知識・理解」に整理される文法事項を知識としてもっているかどうかではなく、それを活用して実際に表現したり理解したりする能力という観点から目標設定や評価を行うこととなります。例えば「過去形を使うことができる」という形で目標設定を行うのではなく、「過去の出来事について話す(書く)ことができる」という形にすることで間接的に文法事項を含めることは可能です。

12. 能力記述文に、話したり書いたりする文の数や語数、要する時間などの数値的な目安を含めてもよいのですか。各能力記述文はどの程度、具体的なもの

とする必要があるのですか。

(答) 本手引きにおいては、学年ごとの学習到達目標を、4技能を用いて「～することができる」という能力記述文からなる「CAN-DO リスト」の形で設定することを推奨しています。1つの能力記述文が示す目標は、年間を通じた学習指導により達成を目指すものであり、あまり細かくすると、それをより具体的に反映させる年間指導計画及び単元計画の作成が難しくなります。したがって、能力記述文の具体性は、あまり細かな数値的目安を含めるよりも、学習指導要領で示されている外国語科及び外国語科の各科目の内容における表現の程度にしておくと、年間指導計画や単元計画と適切に関連付けがしやすくなると考えられます。

13. 学年ごとに学習到達目標を設定する際、一つの技能ごとにいくつくらいの能力記述文を作成するのが適当ですか。

(答) 具体的にいくつの能力記述文を作成するのは、卒業時の目標、(高等学校の場合) 当該学年で履修する科目の単位数、各能力記述文について評価をする際に要する時間などを考慮して決めることになるため、一概にいくつが目安ということは言えませんが、少なくとも、能力記述文を設定し過ぎて評価ができないという事態は避けなくてはなりません。

目標設定からそれを達成するための授業内の活動、評価の実施にいたるまでの実行可能性を考え、無理のない範囲で設定することが適当です。

14. 「CAN-DO リスト」の形で学習到達目標を設定するにあたって、国のひな形はあるのですか。

(答) 本手引きは、各学校が「CAN-DO リスト」の形で学習到達目標を設定する過程を経ることにより、日々の授業や評価の改善に役立てていただくために作成しているものですので、現段階では、「CAN-DO リスト」の形での全国一律の学習到達目標は示していません。

15. 外部検定試験に関する到達目標を設定してもよいのですか。(例. 〇〇試験で〇級あるいは〇点がとれるようになる)

(答) 学習到達目標の達成状況を把握するにあたって、卒業時の目標、学年ごとの目標、単元計画等を作成した上で、外部検定試験等を外部指標として補足的に活用することは可能です。

その際、その外部検定試験が何を測定しているのかを把握した上で活用することが重要であり、外部検定試験の受験結果そのものが目標となるべきではないこと、更に、外部検定試験の結果によって評定につながる評価をすることは適当でないことに留意する必要があります。

16. 「CAN-DO リスト」の形で学習到達目標を設定するにあたって、学校内や外国語科内でどのように取り組めばよいのですか。

(答) 学習到達目標の設定過程に、外国語科担当教員や可能であれば外国語指導助手など、外国語教育に携わる者全員が参加し、生徒の実態を踏まえた上で、育成したい能力や生徒像、学習指導要領に基づいた指導と評価の方法を共有することが必要です。そのためには、管理職の理解や協力、リーダーシップの発揮が期待されます。

また、目標を設定した後も、実際の授業における言語活動の計画や言語活動を効果的に行うための教材の準備等について、外国語科担当教員等全員が協力するとともに、互いの授業の参観等を通じて、指導方法や評価方法等を共有したり改善したりすることが望まれます。

なお、外国語科担当教員が1、2名程度しかいない小規模校等において「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標を設定する際は、例えば中学校であれば、同一の教科書を採択している地区内で複数の学校が協力し合うことなどが考えられます。また、地域の拠点となる学校を中心とした協力体制を作ることも考えられます。ただし、学習到達目標は、それぞれの学校における生徒の実態等を踏まえ、各学校が設定する必要があります。

17. 「外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠 (CEFR)」や CEFR を踏まえた国内の取組、外部検定試験の実施団体が開発した「CAN-DO リスト」をそのまま使ってもよいのですか。

(答) 学習指導要領に基づき、卒業時及び学年ごとの学習到達目標を、年間及び単元ごとの指導と評価の計画の策定と並行して設定することにより、指導や評価の在り方を見直し、授業改善につなげることがこの取組のねらいです。既存の「CAN-DO リスト」をそのまま使うことは想定されません。

ただし、例えば、能力記述文(言語を使って「～することができる」という形の文)の書き方や各能力記述文の難易度に基づいた配置について、全体的な能力発達段階を示している「外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠 (CEFR)」や CEFR を踏まえた国内の取組、外部検定試験の実施団体が開発した「CAN-DO リスト」等を参照することはできます。既存の取組を参照することにより、学年の進行とともに学習到達目標も生徒の発達段階に応じたものを作成することが容易になると考えられます。

なお、既存の取組を参照する場合であっても、各学校や在籍する生徒の実情に応じた分かりやすいものを作成し、指導や評価に活用する中で、設定した目標が生徒の実情に合うものとなるよう、適切な時期に見直すことが重要です。

追加質問

18. 入試に関する事項(例. 大学入試センター試験の大問○で○割得点できる)を含めてもよいのですか。

(答) 「CAN-DO リスト」の形で設定する学習到達目標は、言語を用いて何がで

きるようになるかを示すものですので、入試に関する事項を含めることは適当ではありません。

19. 生徒間の学力差が大きい学校においてはどのように学習到達目標を設定すればよいのですか。中間層の生徒の英語力を想定するのですか。

(答) 本手引きにおける学習到達目標は、全ての生徒に求められる英語力を達成するためのものです。これを前提とした上で、生徒間の学力差が大きい学校においても、生徒全員が学習意欲を持ち続けることができるように工夫することが大切です。例えば、「全ての生徒に求められるのは、設定した 10 項目のうち①～⑥の 6 項目を達成することであり、習熟に時間がかかる生徒にとっては、少しでも①～⑥の 6 項目に近づくよう学習意欲を維持させ、目標を超えた伸長がみられる生徒には、さらに⑦～⑩項目までの達成を目指す」といった目標設定することなどが考えられます。

20. 卒業時の学習到達目標は第 3 学年（最終学年）の目標と同じものとなるのですか。

(答) 第 3 学年の学習到達目標を卒業時の学習到達目標とすることも可能です。なお、本手引きにおける「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標例では、卒業時の目標は 4 技能を併せて一つの文で示し、第 3 学年を含めた学年ごとの学習到達目標については、技能別に複数の能力記述文で示しています。

〔活用方法〕

21. 「CAN-DO リスト」の形で設定した学習到達目標は、どのように活用するのですか。

(答) 外国語担当教員等全員が、「外国語表現の能力」と「外国語理解の能力」について、卒業時までには生徒にどのような力を身に付けさせることを目標としているかを常に確認するとともに、当該単元の学習を通じて、言語を使って何ができるようになるかということを意識した指導と評価を行うことが期待されます。

そのためには、「CAN-DO リスト」の形で設定した学習到達目標を年間及び単元の指導と評価の計画に位置づけ、各単元・各時の指導や評価に反映させることが重要です。

22. 従来作成している年間指導計画と「CAN-DO リスト」の形で設定した学習到達目標とはどのような関係にあるのですか。

(答) 「CAN-DO リスト」の形で設定した学習到達目標が年間及び単元の指導と評価の計画に反映され、有機的に連動していることが重要です（○ページ『CAN-DO リスト』の形での学習到達目標例及び年間指導計画・単元計画への反映例」参照）。

学習指導要領の外国語科及び外国語科の各科目の目標に基づく学年ごとの学習到達目標は、中学校の場合は外国語科の各単元での指導を通じて、高等学校の場合は外国語科の科目の各単元での指導を通じて、実現されることとなります。

23. 「CAN-DO リスト」の形で設定した学習到達目標の達成に資する授業実践の例を教えてください。

(答) 「CAN-DO リスト」の形で設定した学習到達目標の達成に資する授業を行うためには、授業の中で言語活動を充実させることが大切です。言語活動の充実は、現行学習指導要領において、生徒の思考力・判断力・表現力等を育むために各教科等を貫く重要な改善の視点として位置付けられています。

○ページ 『「CAN-DO リスト」の形で学習到達目標例及び年間指導計画・単元計画への反映例（高等学校）』を例にとると、この指導案で取り上げられている学習活動（言語活動）は、以下のような形で「CAN-DO リスト」の形で設定した学習到達目標の達成に資するものとなります。

主な学習活動（言語活動）

- ・各セクションの内容を口頭で要約する。
- ・ペアで、メモに基づいて、自分の将来の夢について伝え合う。

単元の目標

- ・人物についての説明を読んで、その内容を口頭で要約する。
- ・読んだことに基づき、自分の将来の夢について話す。

学年の目標

- ・聞いたり読んだりしたこと、学んだことや経験したことに基づき、情報や考えなどについて、話し合ったり意見の交換をしたりすることができる。

卒業時の目標

英語を通じて、場面や状況、背景、相手の表情や反応などを踏まえて、話し手や書き手の伝えたいことを的確に理解するとともに、自分が伝えたいことを適切に伝えることができる。

また、文部科学省及び国立教育政策研究所による次の資料には、「外国語表現の能力」や「外国語理解の能力」と対応する授業実践例や言語活動例が含まれていますので、参照ください。いずれも、校種別に出されています。

- ・「新学習指導要領に対応した外国語活動及び外国語科の授業実践事例映像資料」（中学校は Vol. 1 及び Vol. 2, 高等学校は Vol. 1, Vol. 2 及び Vol. 3）
※中学校の Vol.2 及び高等学校の Vol.3 については、文部科学省のホーム

ページに各事例の学習指導案を掲載しています。

http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1322195.htm

・「言語活動の充実に関する指導事例集」

http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/senseiounen/1300990.htm

・「評価規準の作成，評価方法等の工夫改善のための参考資料」

<http://www.nier.go.jp/kaihatsu/shidousiryou.html>

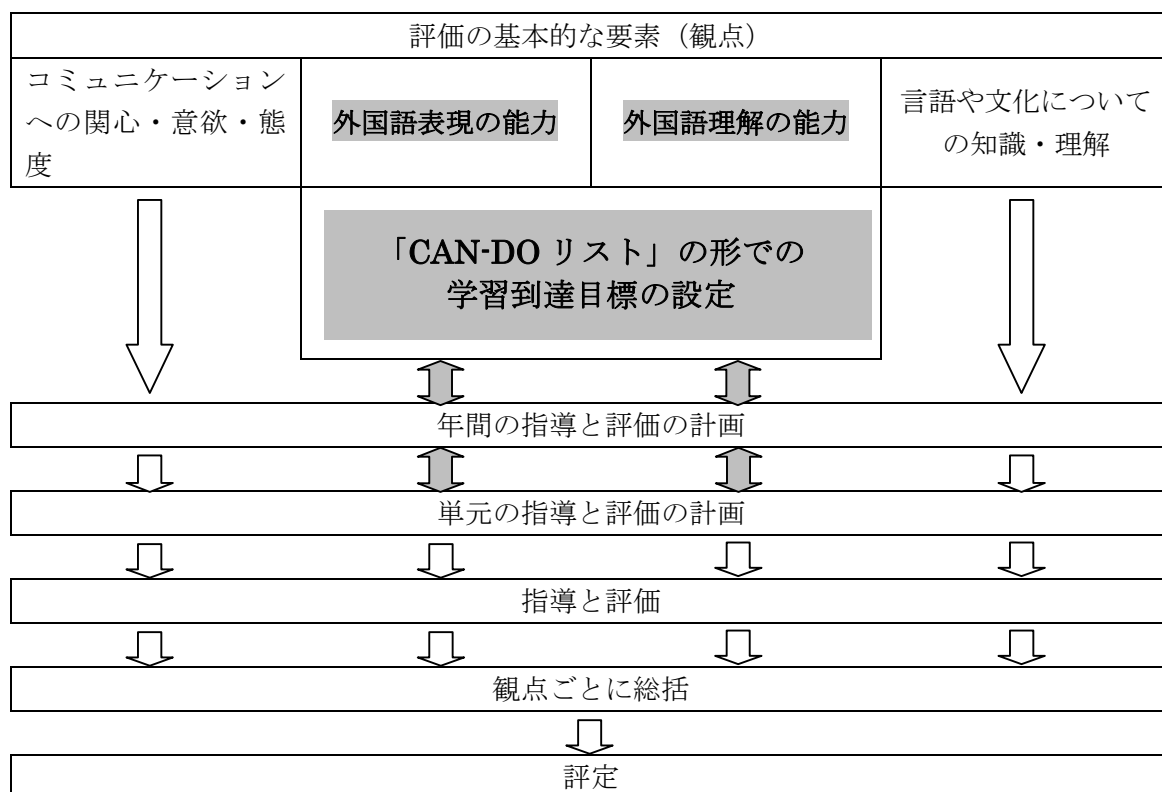
24. 外国語科における観点別学習状況の評価と「CAN-DO リスト」の形で設定した学習到達目標とはどのような関係にあるのですか。

(答) 観点別学習状況評価の趣旨として、指導と評価の一体化を通じて、学習指導の在り方を見直すことや個に応じた指導の充実を図ること、学校における教育活動を組織として改善することがありますが、「CAN-DO リスト」の形で学習到達目標を設定することにより、これを観点別学習状況の評価における「外国語表現の能力」及び「外国語理解の能力」の観点の評価に生かすことが期待されます。

なお、観点別学習状況の評価においては、「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」及び「言語や文化についての知識・理解」の観点と併せて、学習指導要領に示す外国語科の目標（高等学校については、学習指導要領に示す外国語科及び外国語科の各科目の目標に基づき、学校が地域や生徒の実態に即して定めた当該外国語科及び外国語科の各科目の目標¹）に照らして、その実現状況の評価を着実に実施することが必要です。

¹「小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校における児童生徒の学習評価及び指導要録の改善等について（通知）（平成 22 年 5 月 11 日）」の別紙 2Ⅱ(1)及び別紙 3Ⅱ1(1)参照

外国語科における観点別学習状況の評価



25. 観点別学習状況の評価における全ての観点について「CAN-DO リスト」の形で目標設定をするのですか。

(答) 観点別学習状況の評価における外国語科の評価の観点は「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」、「外国語表現の能力」、「外国語理解の能力」及び「言語や文化についての知識・理解」の4観点です。

これに対し、「CAN-DO リスト」の形で学習到達目標を設定する際は、言語を用いて何ができるようになるかという能力記述文を用いて表すため、これに対応しやすいのは、4つの観点のうち「外国語表現の能力」及び「外国語理解の能力」の2つの観点になります。

26. 観点別学習状況の評価における単元の評価規準²を「CAN-DO リスト」の形で学習到達目標として使ってもよいのですか。

(答) 本手引きにおいては、言語を用いて「～することができる」という能力記述文の形（「CAN-DO リスト」の形）で、学習指導要領の外国語科及び外国語科の各科目の目標に基づく学年ごとの学習到達目標を設定することを推奨しています。したがって、観点別学習状況の評価における単元の評価規準が

² 評価規準とは、設定した目標について、生徒がどのような学習状況を実現すればよいのかを具体的に想定したものである。観点ごとに設定し、「おおむね満足できる」状況を示している。

そのまま「CAN-DO リスト」の形で設定する学習到達目標となることは考えにくく、年間を通じて、複数の単元における学習を通して、ある学習到達目標を達成することになります。

単元の評価規準は教科書などの教材の内容等に応じた実際の学習活動を踏まえた具体的なものが想定されますが、学年ごとの「CAN-DO リスト」の形の学習到達目標は、年間の指導を通じて達成されるものであり、より抽象度の高いものとなることが考えられます。

追加質問

27. 「CAN-DO リスト」の形で設定した学習到達目標は、どのように公表したり生徒や保護者等と共有したりすればよいのですか。

(答) シラバスを作成している学校については、シラバスに「CAN-DO リスト」の形で設定した学習到達目標を反映させ、生徒と共有するとともに、これを公表することが考えられます。また、「CAN-DO リスト」の形で設定した学習到達目標を生徒による自己評価のために分かりやすく書き下したものを作成する場合は、これを公表することも考えられます。(「30. 『CAN-DO リスト』の形で設定した学習到達目標を、生徒による自己評価に用いてもよいのですか。」の回答も参照ください。)

[設定した学習到達目標の達成度を把握するための評価]

28. 設定した学習到達目標すべてについて評価しなければならないのですか。

(答) 「CAN-DO リスト」の形で設定した学習到達目標にそのまま準拠した評価を行うのではなく、年間及び単元の指導と評価の計画に位置付けた目標の達成状況の評価することになります。すなわち、単元の目標の達成状況の評価することで、間接的に「CAN-DO リスト」の形で設定した学習到達目標すべてについて達成度を評価する必要があります。

したがって、あらかじめ、「CAN-DO リスト」の形で学習到達目標と年間及び単元の指導と評価の計画を関連付けておくことが重要です。

29. 「CAN-DO リスト」の形で設定した学習到達目標を達成できなかった生徒についてはどのように対応するのですか。

(答) 習熟により時間がかかる生徒についても、きめ細やかな指導を通じ、最終的に目標を達成することを目指すことが重要です。その際、生徒が目標に到達しつつある過程を教員が適切に評価し、生徒の学習を支援することが重要です。

30. 「CAN-DO リスト」の形で設定した学習到達目標を、生徒による自己評価

に用いてもよいのですか。

(答) 生徒による自己評価にも用いることは有益です。教員による評価とは別に、「CAN-DO リスト」の形で設定した学習到達目標を生徒と共有するとともに、生徒による自己評価を促すことによって自分の外国語能力を客観的に捉えることは、生徒による学習の振り返りにつながり、生徒の外国語学習への意欲を向上させることができます。その際、学習到達目標を生徒に分かりやすく書き下した自己評価表を作成することも考えられます。

また、教員による評価と照らし合わせることにより、指導の振り返りにもつながります。

ただし、生徒による自己評価の結果を、教員が行う評価に組み入れることはできません。

追加質問

31. 「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標の評価を、学年末の成績（評価や評定）にどう反映させるのですか。

(答) 「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標は、観点別学習状況の評価のうち、「外国語表現の能力」と「外国語理解の能力」の評価について活用するのに適しています。その際、学習到達目標に対応した学習活動の特質等に応じて、多肢選択形式等の筆記テストだけでなく、面接、エッセー、スピーチ等のパフォーマンス評価³、活動の観察等、様々な評価方法の中からその場面における生徒の学習状況を的確に評価できる方法を選択することが重要です。

これに加えて、観点別学習状況の評価においては、「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」及び「言語や文化についての知識・理解」の観点についてもそれぞれ評価する必要があります。その際、「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」は、生徒が言語活動に積極的・主体的に取り組むことがコミュニケーション能力を身に付ける上で不可欠であるため極めて重要な観点であること、「言語や文化についての知識・理解」は、単に知識を暗記しているかどうかということではなく、知識・理解がコミュニケーションを目的とした言語運用に資する形で身に付いているかを評価することに留意する必要があります。

なお、生徒の学習の実現状況を記録するための評価を行う際には、単元等のある程度長い区切りの中で適切に設定した時期において評価した上で、学期や学年といった単位で学習の実現状況を総括することになります。その際、あらかじめ、それぞれの評価結果をどのような方法で総括し、評定に反映させるかを定めておくとともに、観点ごとの総括及び評定への総括の考え方や方法について、生徒及び保護者に十分説明し理解を得ることが大切です。

³ パフォーマンス評価の例としては、国立教育政策研究所「評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料（中学校 外国語）」（平成 23 年 11 月）の事例 4、及び「評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料（高等学校 外国語）」（平成 24 年 3 月）の事例を参照

〔達成状況の把握，設定した学習到達目標の見直し〕

32. 設定した学習到達目標の見直しは，いつ，どのように行えばよいのですか。

(答) 外国語科担当教員等が全員で生徒の目標の達成状況を把握し，必要に応じて指導方法を改善します。また，評価の妥当性及び信頼性を高める視点から，評価の方法も見直します。さらに，設定した目標が適切なものであったかどうかを検討し，必要に応じて，設定した目標の内容や難易度，目標の設定や評価を行う時期を変更するといった PDCA サイクルを確立することが重要です。

見直しの時期としては，学年末が望ましいですが，学年途中で見直す場合には，生徒や保護者へも周知する必要があるため，どのような場合に見直しを行うのか，あらかじめ決定しておく必要があります。

追加質問 (案)

33. 設定した学習到達目標について，生徒の達成割合を示す必要はあるのですか。

(答) 「CAN-DO リスト」の形で設定した学習到達目標は，一人ひとりの生徒について達成状況を把握すべきものであり，学級などの特定の集団のうちの何人の生徒が目標を達成したかという割合を把握することが主たる目的ではありません。

ただし，特定の学習到達目標について，集団の中での達成割合を把握することにより，当該目標の設定が適切であったかどうかを見直すための判断材料とすることは可能です。